

島根大学教育学部紀要

(人 文 ・ 社 会 科 学)

第 38 卷

平成 16 年 12 月

島 根 大 学

高校時代に生活や性をどう考えていたか ～ 大学生の振り返り調査より～

猪野郁子* 吉岡美香**

Ikuko Ino and Mika Yoshioka

The Senior High School Student's Opinion on the everyday Life and Sexual Relation

～ Think back to the senior high school student life～

[キーワード：生活目標・身体特徴・異性関係・人間関係]

1 はじめに

いつの時代も、大人から見れば、若者は何を考えているか「わからない」存在である。

大学生と接していて、最近続けざまに似たような事例に出くわす機会が増えている。その一つが、異性との性関係も含めた人間関係のもつれである。一昔もふた昔も前からこのような問題は存在していたであろうが、自分達で解決する能力を今よりは持っていた。しかし、最近では解決できなく、どうにもならない状態にまでもつれ込ませる人たちが増えてきていると実感している⁽¹⁾。また、大学の学生指導は非常に丁寧で、密になり、学生側から見れば自由が存在しなくなっている。指示待ち人間が増えている、いやそういう人間ばかりであるから、丁寧にしてやらないととんでもないことが起こるのだという考え方もある。しかし、学生自身が自らの責任をもって、大学生活を送る（留年するも、卒業延長するも、課外活動に専念するも）ことが許されなくなっているように感じられる。筆者自身、保健管理センター所長として、この片棒を担いできたところもある。

大学生としての最低4年間という時間は、人生の中でどういう時間なのであろうか。社会に出て行くための力を蓄える時間なのか、社会生活への準備の時間なのか、社会生活への基礎学力を培う時間なのか。大学受験までの受験期と社会生活を始めるまでの狭間の、人生で一番責任のない自由な時間なのか（この就職難の時代にこんな悠長なことは言っておれないのが現実なのだ）。

大学生活をどう捉えるかで、こちら側の指導の仕方も変わってくるのであるが、社会全体が、力のある者（大

人）が成長過程にいる子ども達を支配する傾向にあり、犯罪の低年齢化と凶悪化に従い、大人側の子ども側への干渉がきつくなっているのが現状であろう。

大学があらゆる面で評価される時代になると⁽²⁾、留年・休学・退学というマイナス評価を防ぐ上でも、ますます学生の生活を束縛しなければならなくなってくるであろうことは想像に難くない。大学側の事情も含めて学生を束縛していることは事実である。それは、失敗させないために、就職戦線に勝つためにあるいは大学の面子のためにである。

こうした状況が強まれば強まるほど、子ども達の発達は抑えられ、幼稚化する。そのことをまた悩んで、さらに手を貸すという悪循環を繰り返しているように感じられる。

さて、NHKは、昭和57（1982）年全国の300地点から抽出された12歳から18歳の男女3600人を対象に生活・受験・校内暴力・親子関係等かなり広範な調査を実施し⁽³⁾、その後現在までに4回調査が実施されている。それによると年々子ども達は、「自由に楽しく暮らし」、「様々な趣味に打ち込み」、「手に職を」つけようとし、「勉強と将来の暮らしはつながらない」として勉強はしなくなってきているという。こうした傾向は親たちも容認しているものであるという⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

今日前にいる学生たちも、高校時代に生活や異性関係等について楽観的に、刹那的に考えていたのであろうか。それとも我々あるいは世間が今も抱えている「大学生」像と一致する高校生生活を送ってきたのであろうか。

学生への教育や生活指導を行なう上で、どういう生活を行なってきたかを把握する必要性は大きい。そこで、

*島根大学教育学部人間生活環境教育講座

**島根町立島根中学校非常勤教諭

大学生への「高校生活」振り返り調査を実施し、20年前の調査結果との比較をしながら、今様の学生像を明らかにしようとするものである。

2 方法

大学生主に1年生を中心に、高校時代の生活・性・身体的不安等についての振り返り質問紙調査を実施した。質問項目は、20年前と比較をするために、NHKが昭和57年に実施した項目の中から、今回の調査に見合う項目を抽出し、質問紙で実施した。

ある授業の終わり20分を充てて、その授業に出席していた学生を対象とした。実施時期は、平成14年10月である。男子学生63名、女子学生97名に配布。全員から回収を行なったが、男子3名の回答用紙には不備が多かったのでこれらは考察から省くこととした。1年生が6割で、残り4割が上級生であった。

3 結果と考察

ここでは、特に高校時代の生活・生活目標・自分自身・異性との交流・身体特徴について報告する。

1) 高校時代の生活について

高校生は自分の生活を自分でコントロールできているであろうか。「朝1人で起きる」「自分の身の回りや部屋を片付ける」「テレビは見たいものを決め、だらだら見ない」「自分で計画を立てて勉強する」「将来何になりたいか決めてい・他」の中から、当てはまるもの全てに丸をつけさせた。その結果が表1である。

「身の回り等の片付け」は女性の方が多く選んでいるが、では女性の方が自立しているかといえばそうと決定するだけの数字ではない。統計的にはいずれの項目にも男女差は見られない。

では、20年前と比較すると、今回はいずれの項目もあまりにも低すぎる結果であった。例えば、「朝1人で起きる」男性は、1982年には57%に対し、本調査では32%。「将来何になりたいか決めてい」男性は1982年47%に対し、本調査では6%であるように。これは対象数や方法等が関与しているのかもしれない。

表1 高校時代の生活 人数(%)

	男性	女性
朝1人で起きる	20(32)	22(23)
自分の身の回りや部屋を片付ける	10(16)	27(28)
テレビは見たいものを決め、だらだら見ない	14(22)	23(24)
自分で計画立てて勉強する	15(24)	16(17)
将来何になりたいか決めてい・他	4(6)	9(9)

2) 高校時代の生活の目標

では高校時代はどういう目標をもって生活をしてきたのであろうか。「その日その日を自由楽しく過ごす」「しっかり計画を立てて豊かな生活を築く」「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」「みんなと力を合わせて、世の中をよくする」の中から、1つ選ばせた。結果は表2である。男女とも半数近くが「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」を選んでおり、次いで「その日その日を自由楽しく」であった。男女差は見られない。NHKは、昭和57年、62年、平成4年、14年と中学生・高校生に調査を実施し、また日本人の意識調査としても同一質問項目で調査を実施しているが、それらによると、「自由楽しく」が増え、「しっかり計画」が減少の傾向にあるという。統計上の差異は見られないが、国民全体が現実主義というか、「未来なんてわからない」という方向で生きているということである。

表2 高校時代の生活目標 人数(%)

	男性	女性
その日その日を自由楽しく	21(33)	24(25)
しっかり計画豊かな生活	8(13)	10(10)
身近な人と和やかな毎日	27(43)	48(50)
みんなと力をあわせ世の中をよくする	1(2)	2(2)

2004年4月イラクにて、ボランティア活動に出かけた日本人3人が人質となった⁽⁶⁾。この3人の中に、この春高校を卒業したばかりの青年が含まれていたことに、いろんな意味で驚きをもった大人は多かったはずである。ありきたりの道ではなく、あえて困難な道を選ぶ若者もいることに。20年前も今も、高校生段階では、人生の目標や生き方を決めていなくてもなく(決められるわけでもなく)、まだ自分が何をして生きていくのか定まっていな者のほうが多い。大学生でさえ、卒業を目前にしてどういう職業につけばよいのかさえ定まらない者が多いのが現実であり、定めていてもそれにつけない現実に直面しているのが現状である。夢がもてない社会であるという意識は、中学生以上の子どもたちには浸透している事実なのであろう。

3) 高校時代の自分自身

高校時代にどういう意識を持っていたかについて、「あきやすいか」「自分勝手か」「しりごみするほうか」「人を頼りにする方か」「自己主張」「競争意識」「自己犠牲」「社会本位」の8点について求めたところ、表3の

表3 高校時代の自分自身

			人数(%)	
	項目	男性	女性	² 検定
あきやすいか	根気がある	28 (44)	38 (39)	
	飽きやすい	22 (35)	32 (33)	
	どちらともいえない・他	12 (19)	27 (28)	
自分勝手か	思いやりがあった	38 (60)	27 (27)	² = 19.13 p<0.001
	自分勝手であった	12 (19)	26 (27)	
	どちらともいえない・他	11 (18)	43 (45)	
しりごみするほうか	自分から進んで何かする方	20 (32)	35 (36)	
	しりごみするほう	24 (39)	31 (32)	
	どちらでもない・他	18 (29)	31 (32)	
人を頼りにするほうか	自分でなんでもする方	27 (44)	43 (44)	
	人をたよりにする方	19 (31)	24 (25)	
	どちらともいえない・他	16 (25)	30 (31)	
自己主張	他人がどういおうと自分を主張	20 (32)	23 (24)	
	多くの人の意見に合わせる	28 (44)	47 (49)	
	どちらとのいえない・他	14 (23)	27 (28)	
競争意識	他人に負けないよう頑張った	23 (36)	33 (34)	² = 10.68 p<0.005
	のんびり自分の人生楽しんだ	34 (54)	36 (37)	
	どちらともいえない・他	5 (8)	28 (29)	
自己犠牲	自分犠牲に他人の面倒見る	31 (50)	34 (35)	² = 8.26 p<0.016
	他人に迷惑かけない	20 (32)	25 (26)	
	どちらともいえない・他	11 (18)	38 (39)	
社会本位	自分の生活よりまず社会	5 (8)	9 (9)	
	社会よりまず自分の生活	33 (53)	42 (43)	
	どちらでもない・他	24 (39)	46 (47)	

結果を得た。男女間で有意な差が見られた項目は、「自分勝手」「競争意識」「自己犠牲」の3項目であった。男性の方が「思いやり」があり、「のんびり自分の人生を楽しむ」「自分を犠牲に」していたとしている。それに対し、女性は、「どちらともいえない」と明確な回答から逃げている。

これら3項目について、20年前の結果を見てみると、男性では「競争意識」の「他人に負けないように頑張る」と「のんびり自分の人生を」が40数%と拮抗しているのに対し⁽⁷⁾、本調査では圧倒的に「のんびり自分の人生を」が多くなっている。しかし、統計的に有意な差が見られるほどではない。女子では、「のんびりと」が減少し「どちらともいえない」が増加したことによって20年前と顕著な差異が見られる。「自分勝手」と「自己犠牲」については、男性は20年前に比べ「他人を思いやり」

「自分を犠牲」が有意に増加しているのに対し、女子は回答を避けるという、つまり、「どちらともいえない」とする者が増えている。

最近の子どもたちは、親のリストラ等から、受験競争・就職戦線に勝ち、猛烈サラリーマンになっても決して保障されないという現実と、なくなる教室内のいじめから、自分を強く出すこと・主張することを嫌う傾向が見られることが、競争ということへのブレーキとなり、程々な人生を志向させていると見ることができよう。

4) 自分自身と生活目標

それでは、自分自身の生き方と生活目標は関連があるのか見てみよう。表4に示すように、「競争意識」「自己犠牲」「社会本位」の3項目に生活目標との関連が見ら

表4 高校時代の生活目標と自分自身

	生活目標	その日その日を自由に楽しく	しっかり計画を立て豊かな生活を	身近な人とногоやかな毎日を	みんなと力を会わせ世の中をよく	その他・わからない	
競争意識	他人に負けないよう頑張るのんびりと自分の人生楽しむ	10 (-2.2) ²	12 (3.0) ^{**}	27 (0.2)	1 (-0.1)	6 (-0.2)	² =16.62
	どちらともいえない・他	24 (1.5)	4 (-2.0) ²	35 (0.6)	2 (0.8)	5 (-1.5)	p<0.034
		11 (0.7)	2 (-1.1)	13 (-1.0)	0 (-0.9)	7 (2.0) ²	
自己犠牲	自分犠牲に他人の面倒を見る	14 (-1.6)	6 (-0.7)	39 (2.7) ^{**}	2 (0.9)	4 (-1.7)	² =19.09
	他人の面倒見ないが迷惑もかけない	12 (-0.3)	10 (2.7) ^{**}	15 (-2.2) ²	0 (-1.1)	8 (1.6)	
	どちらともいえない・他	19 (2.0) ²	2 (-1.9)	21 (-0.7)	1 (0.1)	6 (0.2)	p<0.014
社会本位	自分の生活より社会のことを考える	1 (-1.8)	4 (2.1) ²	7 (0.2)	1 (1.5)	1 (0.5)	² =18.47
	社会のことよまず自分の生活	23 (0.6)	10 (0.8)	38 (0.8)	0 (-1.7)	4 (-2.3) ²	
	どちらともいえない・他	21 (0.4)	4 (-2.0) ²	30 (-1.0)	2 (0.8)	13 (2.6) ^{**}	p<0.018

()は、調整残差 p<0.1 * p<0.05 ** p<0.01

れた。「他人に負けない」ように頑張る人、「他人の面倒もみないが迷惑もかけない」人、また、「自分の生活より社会のことを考える」人は、「しっかり計画を立てた豊かな生活」を志向していることである。「自己犠牲」の人は「身近な人とногоやかな毎日」を志向している。

5) 高校時代の身体特徴

「夜眠れない」から「頭が痛い」までの7項目について、「よくある・時々ある」群と、「たまにある・ない」の2群に分けて表にあらわしたものが表5である。「肩がこる」は、女性の方が有意に多いことである。また、女性の半数と男性の4割が「疲れやすい」としており、女性の4割が「おなかが痛い」「たちくらみやめまいがする」としていることは注目される。2002(H14)年のNHKの調査にも、「疲れやすい」「肩がこる」が平成元年よりも増加していると報告されている⁽⁸⁾。最近の高校生は何か疲れており、自律神経失調症といわれるようにバランスを崩している者が増えていることの反映であろう。

表5 身体特徴

人数(%)

	男性		女性		検定 ²
	よくある時々ある	たまにあるない	よくある時々ある	たまにあるない	
夜眠れない	16 (25)	46 (73)	26 (27)	70 (72)	
疲れやすい	26 (41)	36 (57)	50 (52)	47 (49)	
朝、食欲がない	23 (37)	38 (60)	28 (29)	66 (68)	
おなかが痛い	20 (32)	40 (64)	40 (41)	57 (59)	
肩がこる	14 (22)	46 (73)	54 (56)	38 (39)	***
立ちくらみやめまいがする	20 (32)	40 (64)	45 (46)	50 (52)	
頭が痛い	20 (32)	42 (67)	34 (35)	62 (64)	

*** p<0.001

表6 身体特徴間の関連

	夜ねむれない	疲れやすい	朝食欲がない	おなかが痛い	肩がこる	立ちくらみやめまい	頭が痛い
夜ねむれない		**	**				
疲れやすい			***		**	**	*
朝食欲がない							
おなかが痛い					**	*	***
肩がこる						***	
立ちくらみやめまいがする							***
頭が痛い							

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

この身体特徴間に関連があるのか見たのが表6である。「夜眠れない」から「朝の食欲」がなく、「疲れやすい」「疲れやすい」から「肩がこる」「立ちくらみやめまい・頭が痛い」と、いくつかの症状間に関連がみられる。かなり若い年齢層にもうつ病の増加がいられている⁽⁹⁾。いじめ等子ども社会の様々な軋轢と将来に夢が持てないような社会に生きていること

等々で子どもの心身に不調をきたし、やる気をなくさせているのかもしれない。

6) 高校時代の異性関係

異性との交流について結果を表7に示す。男女とも7～8割の者に好きな異性があり、5割近くが1対1での付き合いをしている。「キス」の経験は、男子6割女子4割と、男子に有意に多い。では、異性との性交渉についてはどう考えているのであろうか。

結婚していない男女の関係について、1982年の結果と今回の結果を対照表にしたものが表8である。今回の対象者は、男女とも7割以上が「深く愛し合っている」なら性交渉を持ってよいとしている。しかし、男子に女子よりも性交渉は「結婚や愛と関係ない」とする者の割

合が有意に多いことである。これはある意味で意外な結果であった。我々の頭の中に、女性は性への抵抗感を低くしてきており、その結果が「性の解放」という言葉で言い表されるように、「愛」や「結婚」にこだわらなくなってきているという考えが植え付けられてきているので、女性の方に愛や結婚にこだわらない性を肯定する者が多いのではないかと予測していたからである。男性に愛や結婚にこだわらない性交渉容認があるということは、従前からの性における男尊女卑が生きているといえる。

では、20年前はどうであったかを見ると、1対1での付き合いは、男女とも14.15%であり、キス経験も同程度である。性交渉については、男性が「深く愛しているなら、性交渉があってもいい」が6割に対し、女性が4

割である。結婚式が済むまでは性交渉は持つべきでないとする女性が3割強と、現在よりも多い。こう見てくると、一見女性の性解放が進んでいる（進むという表現が正しいのであろうか）ように見えて、その実、底流では表面に見えるほどではないのではなからうか。これは、性教育が功を奏しているのか、やはりジェンダーが関わっているのか、今回の調査からは明白にすることはできない。

現在は寂しい人が多いという。女子中学生・高校生もこの「寂しさ」を解消するために、性に走るといわれている⁽¹⁰⁾。また、「援助交際」という新しい言葉での売春がなくならないことを見ると、性交渉をもっとラフに考えている人たちもかなりいるのではないかと疑いたい。島根県が平成15年に実施した「青少年及び保護者等の行動と意識に関する調査」によると⁽¹¹⁾、好きな相手との性行為は、高校生の男子7割女子8割が容認し、中学生の男女とも5割が容認している。大人では、30

表7 異性との交流

		人数(%)		
		男性	女性	² 検定
好きな異性がいた	いた	52 (83)	71 (73)	
	いなかった	11 (18)	26 (27)	
1対1で付き合っている異性がいた	いた	34 (54)	45 (47)	
	いなかった	29 (46)	51 (53)	
異性から好きだといわれたことがある	ある	38 (60)	62 (65)	
	ない	25 (40)	34 (35)	
異性に好きだといったことがある	ある	35 (56)	44 (45)	
	ない	28 (44)	53 (55)	
1対1で異性と手をつないだり腕を組んだことがある	ある	37 (60)	47 (49)	
	ない	25 (40)	50 (52)	
キスしたことがある	ある	39 (59)	39 (40)	**
	ない	25 (41)	58 (60)	

** p<0.01

表8 結婚していない男女の関係

		人数(%)			
		1982年#		2002年	
		男性	女性	男性	女性
結婚式が済むまでは性交渉はすべきでない		95 (14)	222 (33)	5 (8)	6 (6)
結婚の約束した間柄なら性交渉を持ってよい		101 (15)	107 (16)	0 (0)	6 (6)
深く愛している間柄なら性交渉はよい		407 (60)	275 (41)	44 (71)	74 (78)
性交渉を持つのに結婚や愛は関係ない		34 (5)	40 (6)	10 (16)	2 (2)
その他		41 (6)	27 (4)	3 (5)	7 (7)
² 検定	男女間	***		**	
	年度間	***		***	
		** p<.001		*** p<.0001	

#NHK中学生・高校生の意識(1982)から抜粋

代が3割容認に対し、40代以上では容認者はごく少数である。援助交際については、高校生男子1割女子5%が容認し、30代男性が5%容認している。この結果から見ると、今回の調査結果には、かなりのベールがかかっていると見てよいのではなからうか。

4 まとめ

大学生がどういう高校生生活を送り、生活についてどう考えていたのかを見てきた。授業後の質問紙による調査で対象者も少なく、これに加えて、高校時代を振り返るということもあって、完璧な状態を把握したとはいえない。しかし、今日の前にいる大学生がどういう高校生であったかを垣間見ることはできよう。

彼らは、未来志向ではなく、今を楽しんで生活し、人間関係で、問題を起こしもしないが深くもない付き合い方をしている。しかし、完全に競争社会がなくなったわけではないので、そのプレッシャーを感じ、疲れた意欲の出ないどこかに不調を訴えながら生活をしている。性については、意識の上では、男性にはいまだジェンダーが生きており、女性も「寂しさ」を解消するために性に走ることはあっても、やはりジェンダーが生きている。

大学生とは、自己責任の上で履修がなされ単位取得をし、卒業していくものという過去の思い入れを持っている教員は多い。「なぜ教員はここまでしなければならぬのか。」「なぜ自分のことを自分の口から言えないのか。」という苦情をたくさん聞く。平成14年度に学生指導マニュアルを作成したが、どれだけ活用されているだろうか。そこには、なぜそこまでしなければならぬのかという、教員側の思惑が働いている。しかし、我々に、社会が要求している人材に合わせて教育をすることを求められているとするならば、実態を把握した上で行なわねばロスは大きいであろう。この、調査結果の裏に隠されている部分を押し量ることも必要であろう。

参考文献等

- 1) 島根大学保健管理センターへの学生からの相談内容は非公開であるためにここに呈示できないが、すんなり別れられないカップルが増え、ストーカー事件等に発展する場合もある
- 2) 大学評価の理論と実際 自己点検・評価ハンドブック、HRケルズ 北村和之他訳、東信堂、1998
- 3) NHK中学生・高校生の意識、NHK世論調査部編、1984年
- 4) 現代日本人の意識構造、NHK放送文化研究所編、NHK出版、2000年

- 5) NHK中学生高校生生活意識調査 NHK放送文化研究所 2003年
- 6) 2004年4月9日付け朝日新聞
- 7) 3)に同じ
- 8) 5)に同じ
- 9) 臨床精神薬理7巻10号、星和書店、2004
- 10) 「援助交際」について考えるためのハンドブック、財団法人女性のためのアジア平和国民基金、1998
- 11) 少年及び保護者等の行動と意識に関する調査報告書、島根県、平成16年